

《追悼特集》中村 哲

他の人の行くことを嫌うところへ行け
他の人の嫌がることをなせ

—— 内村鑑三『後世への最大遺物』

構わん、続けよう
誰もが押し寄せる所なら我々が行く必要はない
誰も行かないから、我々がゆくのだ

—— 中村哲『ダラエ・ヌールへの道』



中村 哲 略歴

1946年福岡県生まれ。医師・PMS（平和医療団・日本）総院長。九州大学医学部卒業。九州大学YMCAシニア。日本国内の診療所勤務を経て、84年ペシャワール赴任以後、山岳無医地区での診療活動に従事。2000年以降は医療活動、戦争難民支援に加え、大早魃に見舞われたアフガニスタン国内水源確保の為に井戸掘削と灌漑用水路建設計画を始動。大規模緑地化を実現。画像：『医者、用水路を拓く』より転載。

《追悼特集》中村 哲

中村 哲先生 追悼特集を組むにあたって

2019年12月4日朝、アフガニスタン東部ジャララバード。中村哲先生と運転手を含む現地スタッフ5名が銃撃に倒れ、落命。突然の訃報に多くの人々が言葉を失いました。この追悼特集を組むにあたり、改めてご冥福をお祈りし追悼の意を表します。

大旱魃という天災、戦禍という名の人災に喘ぐアフガニスタンにて30年以上もの間、中村哲先生は人々の病、飢え、渇きの難題に向き合い闘ってこられました。暴力と敵対と不信が支配する世界の最前線で、「天の恵みと人のまごころは信頼に足る」(『天、共に在り』) ことの確信を私たちに伝えて下さいました。私たちは中村哲先生の遺された言葉を胸に、平和とは、豊かさとは、援助とは、いのちとは何かと問い続けつつ、誰もが行かない場所へ、誰もが向き合うことを躊躇う課題へと足を踏み出す勇気を持ちたいと思います。本追悼特集が学生YMCAに連なり、若き日の中村哲先生と歩みを同じくする私たちの勇気の種となることを祈願します。

本追悼特集は二部構成で組まれています。前半では追悼文集の形式をとり、九州大学YMCAの同窓生が語る中村哲先生、ペシャワール会立ち上げ当時の福岡YMCAと中村哲先生、90年代の学生YMCAと中村哲先生、それぞれの交わりの記憶を綴って頂きました。後半では、2006年3月4日に開かれた九州大学YMCA100周年記念会における「平和をつくる」講演を音源から起こし、全文を掲載しました。

あの日あの時代、中村先生は私たちと歩みを共にされ、アフガニスタンと出会い、自身の行くべき地へ発って行かれました。その記憶と記録を通して、中村哲先生のメッセージと生き様を私たちの心に刻みたいと思います。

追悼特集編集担当者 記

※本特集での写真掲載にあたり、福島恭輔様、宮崎信義様、天児都様、志満秀武様、末本正昭様(ペシャワール会)、落合道夫様より写真提供のご協力を頂きました。講演音源の文字起こし作業は現役生の万奕さん、池本さん、田淵さんにご協力頂きました。心より御礼申し上げます。

中村 哲兄を偲ぶ

九州大学 YMCA シニア 宮崎信義

2019年12月4日、中村哲兄がアフガニスタン・カンダハル州ジャララバードで活動に向かう車に同乗中、何者かに銃撃され、腹部・胸部に数ヶ所被弾し落命した。同乗の5人も死亡。35年前からペシャワールでのハンセン氏病診療（日本キリスト教海外医療協力会 JOCS*から派遣）から山岳地帯での診療、軽症となった方々の自立のためのサンダル工場などの設置、初期から現地のスタッフの育成に努めていました。ソ連軍の侵攻やタリバン政権や複雑な部族間の争いから、300万人にも及ぶ難民の生活の場を支援（井戸から用水路）し、現在では65万人の方々で緑野となった地で家族と暮らせるようになったと聞きます。そのどこに中村哲君の殉難の原因があるのでしょうか。悲しい、悔しい。涙が出る中で、イエス様の憐れみと受け入れ、そしてご遺族の癒しを祈りました。親しくして頂いた私の娘たちからもメールが寄せられました。その他多くの同級生や知人からもEメールが多数寄せられました。祈祷会でも主のおとりなしを切に祈りました。12月8日には、中村哲医師の遺体が尚子夫人・長女の秋子さんと共に帰国し、12月9日には、衆議院総会で、中村哲兄を追悼し1分間の黙祷が捧げられたと聞きました。多くの方々の尊敬と共感が寄せられたものでしょう。私は、哲君（哲ちゃん）の学生時代から海外医療協力に至る若き日々を知る者として、以下のように追悼の祈りと合わせて覚書を寄稿致します。（JOCS* ; Japan Overseas Christian medical cooperative Service）

哲君は、1946年9月15日、中村勉・秀子の次男として古賀市（当時は町）に出生されました。10年前にも、彼の特集が公開されましたが、昆虫（特に蝶類）採集に没頭していたことや、高校時代から既にフロイト（精神分析）や森田正馬（森田療法）などの精神医学書や、明治のキリスト者である内村鑑三全集を愛読していたこと、これは実家を訪ねて驚きましたが、本当に風貌とはかけ離れた広さと深さを感じました。

古賀の実家は、「ひかり荘」という旅館を営んでいましたが、当時主な御得意さんの製紙工場は閉鎖間近ということで経営は苦しかったのではないかと思います。しかし気丈夫でやさしいお母さん（1966年に逝去された中村秀子さん）と頑固そうなお父さん（中村勉さん、大戦前からの筋金入りの共産黨員）、強そうな兄さん（中村透さん）に囲まれたありふれた家庭でした。それとはなく知ったところによると、ご両親は戦前の左翼青年と沖中仕の親分のお嬢さんであったとのこと。その親分は「花と竜」の玉井金五郎で叔父さんが作家の火野葦平ということであった。そのことを彼が全く誇る気配も見せないことと、その構成が彼の人となり大きく影響を与えたことは想像に難くありません。

彼の実家でも大変お世話になりましたが、親交を深めていくにつれて、彼の思慮深さや精神史に感動しました。

1966年4月に九大医学部に入学(同期)。クラス100人のうち2人がくじ引きで定数2の学友会代議員となり、初めて中村 哲という名前を意識するようになりました。風貌はというと、ばさばさの髪に作業服、くったくのない表情、ただ言うことがやたらと革新的であり、聞けば「民青だ」と言うことでした。私は保守的であったせい(後に変化するが)余り良い印象を受けなかったようです。しかし、クラス討議で議論がまとまらず、お互いに代議員であったこともあり、クラス討議の調整で話し合っていると、なんとお互いにクリスチャンであったことを知りました。その後は、ふりだしに戻って親交を深め、私の下宿や古賀の彼の実家を行き来しました。YMCAでの活動や学生運動も共に行動しました。1961年12月24日、西南学院中学3年時に、香住ヶ丘教会にて洗礼を受けクリスチャンとなったことも聞き、その縁で私も同じ教会に転会致しました。

教養部から専門課程にかけて、当時は数年先の70年安保闘争を意識していましたが、日常的にはベトナム反戦運動や原子力空母エンタープライズの佐世保入港反対運動(九大YMCAから現地へ)、大学二法案反対運動で専門性に埋没することなく、社会にも目を開いていくのが当たり前と受け止められていました。その過程でも彼の言動に一片の浮ついたものを感じませんでした。彼の口癖でもありましたが、「見栄や銜いではなく・・・」「金科玉条ではなく・・・」が口癖であり、つまり真実を重んじ、論評だけの売名行為を軽視し、教条主義とも最も遠い人間であることは間違いのないと思います。この時、同級生で九大YMCAの仲間に故・佐藤雄二君(40代前半の若さで逝去)がいました。彼は後年、中村哲兄の支援団体であるペシャワール会事務局長として働くこととなりました。

九大YMCA(KSCA)では、佐藤雄二君・佐藤誠さん御兄弟は、長く「筑豊の子供を守る会」で地道な活動をしていました。また中村哲君と私は、無医村診療などに参加したいと思っていましたが、残念ながら九大セツルメントや九大仏教青年会が実施しているばかりでした。そこで私たちは突拍子もないことを思いつき九大セツルメントの鹿児島県の無医地区診療に参加致しました。その他のYMCAの活動は、日常の読書会(マックス・ウエーバーなど)が主体でしたが、原子力空母の佐世保寄港に反対する意思表示で九大YMCAから佐世保基地前のデモに参加しました。九州地区大学YMCAの阿蘇夏期学校での滝沢克己先生の講演「インマヌエル」は優しい口調ながらとても内容が深く理解困難でした。しかし、九大YMCAから参加した女子学生が山中に入り消息が分からなくなったために、夏期学校参加者が全員で捜索するというハプニングがありましたが、その学生も見つかり、その後は他学の方々とも気持ちが一致したことは懐かしい

思い出です。『天、共に在り』の素地は、育った家庭や神経症的な苦悩（本人の話）からだけではなく、このような経験からも形成されたのではないのでしょうか。

1968年6月2日22時48分頃、アメリカ空軍のファントム偵察機が、九州大学箱崎地区内で建設中の大型計算機センターの屋上に墜落しました。この時、名島の九大YMCA寮にいた私は、墜落時の轟音を聞き、哲君と共に九大箱崎キャンパスに駆け付けましたが、通路を米兵が固めて私たちは自動小銃を向けられ、恐怖感と共に「日本は独立国なのか」と疑ったほどでした。

また彼の人柄の特徴の一つは、文章の簡潔さと共通して、金銭に対して淡白というか恬淡であり、お互いに貧乏学生でしたが、何か食べようと言うと無造作にポケットからお金を取り出していました。お腹をすかしてもお金がない時は、ある者が出すといった具合でした。文章といえば、彼からの手紙は罫線のない白い紙に一見無造作に書かれたもので、所々に訂正した箇所がありましたが、実に簡潔で自然な文章でした。修辞文のような形容詞の多用や回りくどい表現は一切なく、それでいて美しく射た文章でした。これは、彼の著書を読んだり講演を聴いた方なら気がつかれると思います。

また語学については天性の才があり、受験や単位を取るためというのではなく、その言語を使う人や文化に興味があったのではないかと思います。試験とは関係のないドイツ語会話に興味を持っていたことには驚きましたが、私はしばしば彼の語学の知識に助けられました。この延長線上が、バイリンガルどころかマルチリンガルともいうべき、現在の英語・ウルドゥ語・パシュトゥン語・ペルシャ語などの才に見られます。正に、今日までの35年間に用いられた天賦の才だと思います。

医療についても共通していました。高校時代からフロイトに関心があったようですが、その意志が精神科医を選び、神経内科の専門医を修得させたものです。海外医療協力を携わると、現地の人々の必要（ハンセン氏病や結核～外科処置や救急医学）から、麻酔科・脳外科・実践的な内科学、そしてハンセン氏病診療開始後に日本では過去の技術となりつつあったハンセン病外科（下肢切断）などを海外で研修しています。当時の日本の医学医療は、正しく研修しようとする、大学医局という閉鎖社会かそれに匹敵するような国公立病院や公的大病院に頼らざるを得ず、従属的な人間関係（誇張はあってもいわゆる「白い巨塔」、「象牙の塔」）が形成されていました。彼はしばしば「まだ大学病院にいるの」と私に言ったように、そのような体制に囚われることはありませんでした。その型破りが羨ましく、また患者の必要によって知識や技術を修得するのが医師の真実の姿だと思ったものです。



【写真】1971年頃（25歳頃の哲君）－拙宅を訪問時－

1973年3月に九大医学部を卒業し、国立肥前療養所に勤務されました。1977年頃に私が偶然に出会った福岡登高会会員から「報酬は余り出せないが我々と一緒にヒマラヤに行ってくれるドクターを知らないか」と尋ねられ、「そのような物好きな医者はいないでしょう。いや一人いる。」と言って中村哲君を紹介しました。哲君は当時、国立肥前療養所で精神科医として勤務していましたので、さすがに無理かなとも思いました。

1978年、福岡登高会の同行医師としてヒンズークシ、ヒマラヤのティリチ・ミールへ。その後の経過は彼の著書に詳しく書かれていますが、行程で出会った現地の人々の病気に苦しむ姿と純朴さに心打たれ、再会を約束したとのことでした。

医師の場合、一人前になるためには大学病院などしかるべき医育機関で長期間の研修を必要とし、それが大学医局の封建制に組み込まれたり、偏った専門志向に繋がるという弊害がありました。中村哲君の場合は真逆で、医療を必要とする人間の側のニーズに自分を合わせるといった進路の選択をしていたようで、羨ましい限りでした。内科的な知識・技術が必要であれば大牟田労災病院や徳州会病院へ、麻酔や脳外科が必要であれば久留米大学へ、ハンセン氏病による機能障害や壊死の手術の技術習得のために韓国へといった具合に、人間の思惑ではなく医療本来の必要に応じて学びを進める、実に爽やかな印象を与えられました。それを世間は変わり者と言うわけですが、なるほどこのように当たり前な選択も彼ならではの決断を必要とするものかと改めて思ったものです。

[海外医療協力へ]

国策以外で海外医療協力を行なっている組織は、JOCS しかなかったこともあり、JOCS にワーカーとして働きたいと申し出られました。JOCS では総主事を勤められた塩月賢太郎先生や奈良常五郎先生、先輩ワーカーの岩村昇先生など尊敬する方々がおられ、ペシャワールからアフガニスタンへの道が少しずつ開けていくようでした。派遣支持教会として香住ヶ丘バプテスト教会、そして同教会の「中村哲兄を支える会」が発足し、後のペシャワール会の一角を担いました。ペシャワール会は特定の思想信条や宗教からなるのではなく、中村哲医師の活動に共感し支援するという多様さが大きな力として結集していくことになりました。1979年11月17日に、中村哲君と宮川尚子さんの結婚式が香住ヶ丘バプテスト教会で行われました。お二人は勤務されていた大牟田労災病院で知り合われたわけですが、当時の哲ちゃんはとても嬉しそうにしていました。

その後の歴史は急展開し、1979年12月24日にソ連軍がアフガニスタンに侵攻。1983年4月JOCS 理事会にてJOCS ワーカーとして派遣決定（福岡徳州会病院勤務中）。1983年5月外国語研修のためロンドンへ（3ヶ月間の英語研修）。1983年9月香住ヶ丘バプテスト教会に「中村哲兄を支える会」が発足しました。1984年1月熱帯医学校（リバプール）。そして1984年5月からJOCS 派遣ワーカーとしてペシャワールへ赴任されました。1984年5月6日にペシャワール会総会でより広く支援する会が発足し、教会関係者も喜んでその中に参加致しました。JOCS を基盤とした海外医療協力に教会が果たした役割は必要なものでしたが、ペシャワール会が発足した後は共に支援していく、特定の宗教や信条・主義にとらわれないことは、中村医師の活動を必要とする人々を中心としたより実効性のあるものという哲君の活動と支援を確かなものにしていくことになったと思います。今、思うとペシャワール赴任当時のJOCS は奉仕者を送っても経済援助や物資の支援には強い制約が課せられていました。しかし、アフガン難民の生命を守るという支援に進んでいくと、先進国の主義主張ではなく、命を支える支援が為の水や用水～農地が不可欠なものです。これらの活動の支援は、ペシャワール会が担っていかれました。教会は離れたのではなく、むしろ喜んでペシャワール会に入っていたと思います。発足後のペシャワール会の活動拠点となる事務所も、福岡市中央区大名にあったYMCA 会館（志満秀武総主事）が快く提供して下さり、また活動の便宜も図って下さったようです。YMCA 会館で英語研修を受けておられた方々や熱気球の会の方々など、それこそ「特定の宗教や信条・主義にとらわれない」多くの方が支えて下さったのです。

ペシャワールに赴任後、哲兄は急性肝炎に罹患しました。2クール（8年間）のJOCS

派遣ワーカーの勤めを終え、その後はペシャワール会からの派遣として事業を継続しました。現地の人々の必要に応えるという哲兄の要請に、ペシャワール会は今に至るまで物心両面で支え、そして協働されました。自分の生活は馬場脳外科での非常勤医師として生計をたて、ペシャワールやアフガンでの働きは、ひたすらボランティアに則ったことも、いかにも彼らしい生き方でした。ただハンセン氏病診療だけでなく、靴工場の建設に代表される患者の生き方にも目を向け、薬や医療器具がないからといったことを理由にせず先ず始めるという在り方も実に彼らしいものでした。

1988年5月にソ連軍が撤退開始（1989年2月撤退完了）、1991年にはアフガニスタン北東部の3診療所を基点として山岳無医地区の診療活動を開始し、ALSをJAMS（Japan-Afghan Medical Service）と改名し、アフガニスタン支援を現地の人々と共により積極化していきました。1997年にはハンセン氏病登録患者は6,000名以上（未治療者は20,000名を超えると推定）で、ペシャワールに2ヶ所の病院、パキスタン～アフガニスタンに5ヶ所の診療所に対応し、現地職員は150名以上に達すると帰国報告会で伺いました。1998年4月にペシャワールにPMS=Peshawar Medical Service（70床、建坪1000坪）を建設し、これには日本の市民から3,500万円の援助（資金の70%）があったとのことです。

2001年からカーブルに臨時診療所設立。2001年9月11日米国で同時多発テロ発生し、タリバン・アルカイダへの制裁という理由で広範囲の爆撃がありました。ソ連侵攻～内戦～国連（米国による）報復で約200万人の死者と600万人の難民が生じたとも報告されました。

彼の立ち位置は学生時代から変わらないと思ったのは、医療活動にとどまらず、被害者ともいえる難民の方々の生活をも支えることに何の矛盾も感じず、実践していったことです。しかも現地の人々や日本からの支援、伝統的な治水技術の活用など、医療の方法論とも一致しています。2001年からアフガニスタン国内に井戸（1,400ヶ所以上、目標2,000本）掘削、水路建設など、現在は用水路によって約65万人が帰還できているとのことです。具体的な活動については、他の証言者や著書をお勧めします。

2002年12月27日に10歳という若さでご次男が脳腫瘍で亡くなられた苦難の時もアフガニスタン支援を続けておられた哲兄が2019年12月4日に凶弾を受け死亡したことの意味は、「神様、なぜこのようなことが起こるのですか」と問いつつ、彼の止むに止まれない心情を現わしているのかと悲嘆のうちに思いました。今はただ、ご家族の慰めと癒し、御国での再会を祈ります。

中村 哲さんの意志を置かれた場で継承していきたい！

～ペシャワール会発足時とYMCAの関わり～

志満秀武（熊本大学 YMCA 花陵会シニア、元・福岡 YMCA 総主事）

12月4日(水)中村 哲さんが凶弾により命をおとされたとのテレビニュースに言葉を失った。「なんということか」徐々に詳細が明かになるにつれ私は祈ることしかできなかった。中村 哲さんのこと、尚子夫人はじめご家族のこと、ペシャワール会の役員の方々のこと、ボランティアで働きをなされている方々のことを覚え祈った。現場の第一線で心血を注ぎ、しかしいつもユーモアをもってアフガニスタンの人々のためにアフガニスタンの人々と共に働き続けた中村さんがこのようなかたちで命を落とすことになったことに悲しみと悔しさを抑えることができない。中村さんにはなお、壮大な計画となすべき働きがあったと思われる。「主なる神様、中村 哲さんにあなたの御許で大なる祝福を与え平安を与えて下さい。尚子夫人はじめご家族のお1人お1人に慰めと力を与えて下さい、中村さんを守るために働き命を落とされた5人のアフガニスタンの方々、そのご家族の上に慰めと力を与えて下さい。」心から祈ります。

中村 哲さんの葬儀において香住ヶ丘バプテスト教会名誉牧師の藤井健児先生は中村さんの追悼の辞の最後に讃美歌 412 番を讃美された。「昔主イエスの蒔きたまいし、いとも小さきいのちの種。芽生え育ちて地の果てまで、その枝を張る樹とはなりぬ」私は共に讃美した。会場で讃美する声が聞こえてきた。

福岡市中央区大名大村ビルにあった福岡 YMCA 一室は水曜日の夜は活気に溢れていた。中村さんを囲むペシャワール会事務局メンバーが集い、会の活動のこと、会員の拡大のこと、会報編集のこと等熱く語り作業に取り組んだ。小さな種がここで蒔かれてとてつもなく大きな実となった。以下、会発足時と YMCA の関わりについて紹介したい。

1983 年春、大名の YMCA に九州大学 YMCA の OB 佐藤 誠さんと弟の佐藤 雄二さん、中村 哲さんが私を訪ねてきた。佐藤 誠さんより九大学 Y 時の友人中村 哲さんが JOCS を通しパキスタン ペシャワールへ派遣されるのでその支援組織を立ち上げるので福岡 YMCA も協力してほしい。ついてはその準備の事務局を福岡 YMCA の中に置かせてほしいとのことであった。当時の福岡 YMCA は全国 YMCA の多大な協力を得て新たな歩みを開始した直後であり活動・事業共に大きな進展があり各部屋もフル稼働の状況であった。

佐藤 誠さんとは学 Y 時代「筑豊の子供を守る会」で共に活動をした仲間であり、お会いした雄二さんの誠実な人柄、中村さんの穏やかな中にも熱く語るアジアへの思いに同じYMCAに連なる仲間として共感をもった。活動が主として夜間であるとのことで、当時の小林省三総主事とも相談し福岡 YMCA としてもその運動の一翼を担うかたちで申し出を受け入れたのである。



中央区大名にあった福岡 YMCA 大村ビル (1983 年頃)



ペシャワール会、福岡 YMCA 祭にて (1985 年頃)
前列中央に中村哲さん、左隣に佐藤雄二さん、前列右端に筆者

中村 哲さんの飾らない人柄、アジアに寄せる思い、とりわけ困難な中にある人々、劣悪な医療環境にあるパキスタンのハンセン氏病の人々へ医師として少しでも貢献し

たいとの熱い思いは私たちの心を揺さぶるものであった。爾来、大村ビルが契約満了で天神三和ビルに移転後の1989年8月5日までペシャワール会の事務局は福岡YMCAの中にあった。ペシャワール会発足時のYMCAとの関係を見ると極めて興味深い。中村哲さんをJOCSで支えその志に深い理解を示したJOCS総主事の奈良常五郎さんは元大阪YMCAの総主事でありその後同じくJOCSの総主事となった塩月賢太郎さんは元日本YMCA同盟総主事である。特に塩月さんは同盟では学生YMCAの主事として全国の学生YMCAの指導に尽力され世界のYMCA運動に多大な貢献をされた方であった。当時会の事務局長であった佐藤雄二さんが若くして天に召された後、塩月さんは自宅を弔問されご夫人に雄二さんのペシャワール会での働きに感謝を述べられた。奈良さん、塩月さん共に中村さんの働きに注目され大きな期待を寄せられていた。中村哲さんも奈良さん、塩月さんには深い信頼を寄せていた。

一方、福岡での活動の中核を担ったのは佐藤兄弟をはじめ九州大学YMCA関係者、香住ヶ丘バプテスト教会を中心とするバプテスト教会の牧師と教会員、福岡YMCAでは理事の間田直幹先生(後ペシャワール会会長)、「アジアを考える会」のメンバー、「ESS(英会話グループ)」のメンバー等であった。とりわけ毎月開催していた「アジアを考える会」は杉山龍丸さん(作家 夢野久作のご長男でインドの砂漠緑化に生涯をかけられた)や内田義弘さん(JICAの農業指導専門家で中南米をはじめ中近東で長年働かれた)の指導で多くの個性的な青年が集っていた。毎日新聞福岡総局の加藤暁子記者(その後海外特派員として活躍している)もよく参加していた。青年海外協力隊OB、海外医療に関心をもつ九大、福大の医学部の学生等々が例会には集っていた。中村哲さんからこれらのメンバーにお話をすると中村さんの人柄と熱い思いに魅かれ多くの会員がボランティアとして喜んで協力を申し出た。1983年5月にペシャワール会発会第1回準備会、同年9月18日に正式にペシャワール会の発会式(会長間田直幹)が開催された。この間、毎週水曜日の夜に事務局会が開かれ上記の多くの賛同者が集い中村哲さんからの報告を聞き(海外からのレポートを含む)、活動計画を検討し、会員募集の方策検討や会報作成・発送等に励んだ。真剣な協議の中にもいつも笑いが溢れ実に楽しい時間を共有できた。21時30分頃に終了後はYMCA近くの居酒屋「一宝軒」に毎回繰り出しほぼ1時間は飲み食い。メンバー相互の交流を深める良き機会でもあった。中村哲さんはいつもこの場の中心にありとつとつと語る語り口。「楽しく長くやってみましょう」が口癖であった。実に愉快的な時が与えられた。

なお、お母さんの中村秀子さんもよくYMCAを訪ねてこられていた。きまって饅頭をお持ちになり「哲がいつもお世話になっています。どうぞよろしくお願いします。皆

さんで召し上がって下さい」この言葉を添えて帰って行かれていた。何度、何十回この饅頭とお礼の言葉をいただいた事か。小柄なお母さんの姿は中村 哲さんとダブッて見えた。お母さんが中国との関係で大事な働きをされていたことを後日知らされた。とても腰の低いお母さんであった。

中村 哲さんの働きは多くの福岡 YMCA の会員の中に今も生きて働いている。同時に全国の YMCA (学生 YMCA、都市 YMCA) に連なる者の心に深く刻まれている。中村 哲さんはイエス・キリストの福音に支えられイエス・キリストに倣って生涯その活動が続けられた。私たちもその置かれた場で中村さんに続く者でありたいと願っている。中村 哲さんありがとう。ご家族の皆様にも主の慰めと癒しがそそがれるよう切に祈ります。

中村 哲という生き方

九州大学 YMCA シニア 伊原 幹治

中村哲さんのことを話す前に、佐藤雄二さんについて、ひとこと語りたい。中村さんが、JOCS(キリスト教海外医療協力会)からパキスタンに派遣されることになった時に、彼を福岡で応援するために1983年に結成されたのが「ペシャワール会」であった。その初代事務局長になったのが佐藤さんで、お二人は医学部の同期生であり、九大YMCAのメンバーでもあった。しかし、佐藤さんは間もなくガンを発症して亡くなられた。佐藤さんが生きてたおられたら、もっと深い関わりを、私も九大Yはしていたと思う。

その中村さんであるが、彼はパキスタンの北西辺境州ペシャワールにあるミッション・ホスピタルに勤務した。私が彼の仕事で注目した最初は、彼がサンダルを作った時であった。当時、中村さんの患者はハンセン病患者で、彼らは手足の末梢神経が侵されていた。そのため、道に落ちていた釘のような物を踏み抜いても痛さを感じないそうで、足の甲にまで釘が突き出ているのに気がつかず、山を越えて病院まで歩いて来た人があったという。そこで、中村さんが考えたのが、古タイヤで作った頑丈なサンダルであった。材料はどこにもあり、安価だというのである。私は、この話を聞いた時に、「おやっ」と思った。それは、医師は病院に来た患者の病気を治すのが仕事であるが、中村さんの発想はもっと広がりを持っており、「何か違う」と、その時直感的に思ったのを覚えている。

その後、彼はJOCSから離れて、より自由に活動を始め、支援組織も「ペシャワール会」一本になった。彼は、病院の外に出て、患者を探す活動を始めた。車が通れない山道を何日もかけて歩いて村を訪れ、雪が降る山の奥地まで行き、最終的にはそこに診療所を何カ所も作ったのであった。

この中村さんの仕事が大きく転換したのは、ソ連のアフガニスタン侵攻による大量の難民の発生と、2000年の大旱魃の深刻化であった。そして、彼の目は病気よりも人々の生活支援に注がれた。そのための食糧支援と井戸掘りであった。それ以降のことについては、語る必要はないだろう。

中村さんの、「武器を取る者は取れ。私たちはクワで平和を実現しよう」という言葉には、イザヤ書2章の「劔を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」という言葉が、「なぜ、わざわざ危険な地域に行くのか」と講演会で問われると、「道で倒れた人を見たら『大丈夫か』と駆け寄るでしょう。それが人間共通の心だと思う」という言葉には、ルカ10章の「善きサマリヤ人」の話が、そして、『天、共に在り』という言葉に

は、「インマヌエル」の言葉がそれぞれ重なる。聖書の言葉が、彼の中で生きていたからこそ、イスラムの人々の友人になれたのではないだろうか。彼は西南学院中学校2年生の時、藤井健児牧師の日本バプテスト連盟香住ヶ丘教会でバプテスマを受けている。そして、医学部への進学を決定した。

用水路の建設が軌道に乗ったころ、数学などの教科書を詰め込んだカバンを持ち歩くようになったという。彼は、用水路、モスクやマドラサ（学校）などを独学で設計し、建設したのである。高校で習った三角法が役に立ったと言っていた。そして、住民から「ドクターサーブ」と最上級の尊称で呼ばれた。

中村さんが私の勤務先に話に来られた時に、事務局の福元満治さんに聞いたことがある。「中村さんはなかなかの達筆ですね」と。福元さんは出版業なので、彼が中村さんに本をかけと言ったのかと思ったのである。ところが、福元さん曰く。「いや、そうではなく、彼が勝手に書いて持ってくるのです」と。なるほど、私は納得した。芥川賞作家の火野葦平は母方の伯父であり、若松を舞台にした『花と竜』の主人公は祖父玉井金五郎がモデルである。火野からは文才を、祖父からは「誰もが行かないからこそ行く」という義侠心を受け継いだ。

私が校長職をしていた時に、学校に新聞社から電話が入り、中村さんのことについていろいろ聞かれたことがあった。ひょっとしたら、ノーベル賞かなと期待したが、受賞はならなかった。しかし、それ以降、毎年この季節になると期待するようになった。結果的に、アフガニスタン政府も私たちも、彼の命を守ることができなかった。もし彼がノーベル賞を受賞していたら違った結論になったのではないかと今でも思っている。それは、マララさんを襲撃した犯人たちも、この賞の受賞者に手を出すことはできていないからだ。

何度、彼の話聞いたかわからないが、いつ聞いても同じ話であった。飾らず、ボソボソと語る口調には誠実さが溢れていた。趣味は登山と昆虫の観察。彼の骨は分骨され、アフガニスタンにも眠るという。

中村哲さんを偲ぶ

九州大学 YMCA シニア 豊永義典

2019年12月4日、自宅でパソコンに向い作業している時に、学Y時代からの仲間のN氏から「中村哲さんがアフガニスタンで銃撃を受けて亡くなったことを知っているか」とのメールがはいった。すぐにインターネットを見たら、そのことが目に飛び込んできた。35年間「天」の守りのもとの、現地の方々と、現地の方々の目線で、ともに作業を続けてこられた中村さんがこのような形で命を落とすことになったのかと、くやしさと悲しさのなかで、しばらく記事を読み続けました。

私は中村さんより2年後輩で、教養部から工学部に移った段階で九大YMCA会館に入ったことから、会館で中村さんを見かけたりすることはありましたが、何かの集まりでじっくり話したりという記憶はほとんどなく、当時会館ではしょっちゅうどこかの部屋で宴会をやっていましたが、酒を飲みながらゆっくり語り合ったということもあまり覚えてはいません。

私にとっては、そのようなお付き合いではあったけれども、学生時代に、それも学生YMCAの活動を通して中村哲さんを知り、その後自分は企業に勤め仕事をしながら生きていくなかで、中村さんがアフガニスタンで医療活動から始まり、井戸を掘ったり、水路を作るということをされていることを会報や書籍や講演会で知るということは、このような先輩を持ったというある意味誇りでもあったし、私自身が生きていくうえでの大きな指針になってきました。

私は所属する教会の全国組織である日本バプテスト連盟全国壮年会連合の働きを通して、全国の壮年の方々との交わりを続けています。この会では毎年13の地方連合が持ち回りで全国壮年大会を担当し、その年の主題を決め、講師を決めて学びを行なっていますが、2010年に北海道地方連合が担当の時に、札幌教会で中村哲さんを主題講師とし、「人は愛するに足る」と題して講演をして頂きました。

その時点までアフガニスタンでやってこられたこと、やっておられることの紹介がほとんどでしたが、最後に聖書に出てくる言葉を引用して、以下のように思いを語られました。

- 2010年2月に用水路建設が終り、6月に砂漠で田んぼが始まった。砂漠が緑の農地に変わった。詩篇23編（「主は羊飼いな…」）が目の前に現出したのである。
- 財産を多くするにしたがって守るべきものが多くなる。それに従ってなお一層悩みが多くなるのではないか。「お金持ちが救われるよりも、ラクダが針の穴を通るほ

うが易しい」というたとえ話は、その通りに思える。

—「良きサマリヤ人のたとえ」が示すように、私達はできる範囲で、隣人のために働いてきたのである。

「3度のご飯が食べられて、家族と一緒に穏やかに暮らせること」が人の幸せであり、この幸せを一人でも多くのアフガニスタンに住む人たちが取り戻せるように、と願いながら働かれた中村哲さんが語られる言葉は、皆さんもそう思われていると思いますが、非常にわかりやすく説得力のあるものです。今回この文章を書くに当たって、これまでに読んだ中村さんの本を読み返し、線を引いている箇所の言葉は、今読んでもそうだなと思いますし、あらためてそのことを自分の歩みのなかで、具体的に行動に表していきたいと思われています。著書『天、共に在り』のなかで「戦争と平和」「不易と流行」の見出しで書かれている次のような文章があります。

- ・アフガニスタンの実体験において確信できることがあるとして、「武力によってこの身が守られたことはなかった。」「私たちが地元の人々に何を求められているのかを汲みとり、人々の心情を察し、信頼感を得て行動する限り、武器は無用である。」
- ・利害を超え、忍耐を重ね、裏切られても裏切り返さない誠実さこそが、人の心に触れるのである。平和とは理念ではなく、現実の力なのである。
- ・何が真実で何が不要なのか、何が人として最低限共有できるものなのか、目を凝らして見つめ、健全な感性と自然との関係を回復すること。「王様は裸だ」と叫んだ者は、見栄や先入観、利害関係から自由な子供であった。それを次世代に期待する。

葬儀のなかで親族のお一人である玉井史太郎さんが語られたという「正しいものは最後は勝つという正義感をそのままに、人間としての美しい気質を受け継いでいた」という言葉が胸に残った。

「…への自由」

ガラテヤの信徒への手紙 5章 13節-14節

九州大学 YMCA シニア 齊藤 皓彦

この追悼文は 2019 年 12 月 8 日日本基督教団西福岡教会の日曜礼拝における齊藤先生の説教を元としています。齊藤先生の許可を頂き追悼文として掲載させていただきます（編集者注）。

今日は、アドベントの第二週です。蝋燭が二本立てられました。イエス様の誕生を憶える日が、また一週間近づきました。このアドベントの時に、先週の 4 日に、突然中村哲さんの訃報が入ってきました。中村哲さんについては私自身個人的にも知り合いましたし、一昨年 9 月から 11 月まで 3 か月にわたって、教会主催の DVD 上映会とボランティアの方々のお話を伺う特別集会を開催しましたので、特別に大きな驚きでした。

教会の何人かの方からのお知らせとお悔やみや、友人からの驚きと無念だとの知らせ、また YMCA から多くの方からの悲しみの知らせが私の元に届きました。これだけ多くの方からの知らせが届いたのは本当に初めてのことのような気がします。私達は、3 回にわたる DVD 上映会を通してご一緒に中村哲さんの活動を見てきましたし、ペシャワール会の会員となって会の活動を支えて来られた方もおられますので、今日は礼拝の中で、中村哲さんの活動を振り返り、その言葉を味わって追悼したいと思います。

中村哲さんは、私より 2 歳年下の生まれですが、私が中村哲さんに始めてお会いしたのは、九州大学 YMCA の名島寮に入っていたときでした。特に鮮明に覚えていますのは、1968 年に米国の世界初の原子力航空母艦エンタープライズが佐世保に寄港したときに、白いヘルメットをかぶって寄港反対のデモに出かけられ、その時に YMCA の名島寮に来られて懇談したときでした。一緒ではありませんでしたが、私も佐世保に出かけて寄港反対デモに加わりました。中村哲さんとは、その後 YMCA 関係で時折お会いしましたが、いつも現在の久山療育園の理事長をしておられる宮崎信義さんと一緒に行動しておられました。

その後、中村哲さんとお会いする機会はあまりありませんでしたが、私が初めてケニアに行った年でしたのでよく憶えています。1984 年に中村哲さんはハンセン病の治療のために、パキスタンのペシャワールの病院に赴任され、ハンセン病を中心とした貧しい人達の診療に携われました。その前年に福岡市で「ペシャワール会」が発足します。会長は中村哲さんの友人であった故・佐藤雄二医師でした。佐藤さんは私の親しい友人でもありましたが、癌で帰らぬ人となりました。そんな動きを私は鳥取の地で聞いてい

ました。

ペシャワールに赴任された中村哲さんはその後、隣国アフガニスタン戦争による難民のための医療事業を開始され、最も困難で医療事情の劣悪な最貧の地に住む人々のための医療活動を継続されます。その活動は、目の前に治療を必要として求めている人がいる、という理由でした。しかもそれは、あまりに困難過ぎる医療活動のため、西欧の NGO も国連も手を出そうとしない、命がけの活動でもありました。中村哲医師は、そこに乗り込んで、こう言われます。「誰もが押し寄せる所なら我々が行く必要は無い。誰も行かないから、我々は行くのだ」と。目の前で苦しむ人から、真剣に求められたときに、誰も行こうとしない場所に赴いて診療活動を続けたのです。「目の前で苦しんでいる人がいれば」という言葉が哲さんの全ての活動を貫いています。今回中村哲さんの本をあれこれ読みなおし、改めてその活動のすごさ、スケールの大きさ多様さに驚かされました。中村哲さんがどんな具体的な活動状況の中で、どういう想いを抱き、どういう決断や覚悟をされたかを知るには、この機会にどれでもいいですから一冊でも本を読んでいただきたいと思います。本当に宝物になるような感動する場面と言葉に出会えます。

今日の聖書の言葉を見てみましょう。今日の聖書の箇所は先週と一緒です。一緒にしたのは訳があります。ここには二つの自由が書いてあります。先週は一つの自由しか語る時間がありませんでした。「私達を束縛しているものからの自由」即ち「…からの自由」についてお話ししました。パウロは「あなたがたは、自由を得るために召し出された」と述べています。ところがその後「ただ、この自由を、肉によって動く機会とせず愛によって互いに仕えなさい」という言葉が続いています。自由にされていたら、何をしてもいいということではないということです。

先週紹介したルターの「キリスト者の自由」という本の冒頭はこう書き始められています。「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な主人であって、だれにも服さない。キリスト者はすべての者に仕える僕であって、だれにでも服する」。つまり、キリスト者は「すべてのものの上に立つ自由な主人であって、同時にすべてのものに仕える僕である」ということになります。相反する命題が同時になりたつのがキリスト者の自由なのです。

ルターが「自由」というとき、それは「…からの自由」（悪魔と罪からの自由、律法からの自由）であると同時に、「…への自由」も意味しています。今日の聖書には「この自由を、肉によって動く機会とせず愛によって互いに仕えなさい」とあります。愛に向かって自由を行使することがイエス様が示してくださった本当の自由なのだと言っているのです。「愛への自由」です。律法とか束縛から自由にされた者は、愛へと踏み出して

いく自由に生きる者になりなさいと勧められています。14 節には「律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によってまっとうされるからです」とあります。3 つの福音書に書かれているようにイエス様が、『心を尽くし、精神を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』これが最も重要な第 1 の掟である。第 2 も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』とされています。また、マタイによる福音書 10 章で「私の弟子だという理由で、この小さい者の一人に冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける」とされています。イエス様の言われる自由とは「愛に向かう自由」「愛への自由」です。

1984 年の中村哲さんのパキスタンのペシャワール赴任後、ここで述べましたようなすさまじい命がけの努力と支援活動の果てに、あのような悲劇に見舞われるとは、悲しくて腹立たしくてやりきれません。でも、彼の著書の題名の通り「人は愛するに足り、真心は信ずるに足る」を生き切った人だと改めて深く教えられました。それは確かにイエス様の語られた通りの「愛への自由」に生きた人だと思わされます。そして、それが彼が大事だと言っている「よい信頼関係をつくること」であり、「信頼関係に向かう自由」「信頼関係への自由」を生み出しているのだと思います。報復ではなく、よい信頼関係を作っていく「愛への自由」を私達も学びたいと思います。それは冷たい水一杯から始まります。

中村 哲さんと名島寮の再開

九州大学 YMCA シニア 落合道夫

1991年7月に九州大学 YMCA 名島寮が再開したとき私は大学院生で、再開後第1期の寮生となりました。再開に至るまでには数年間にわたる理事会、OB・OG会、現役学生を取組がありました。現役学生でそれを中心的に担われたのは故・山田信^{ゆき}さんでしたが、5歳後輩の私も山田さんの後にくっつきながらいろいろな準備をし、いろいろな人と会いました。振り返って思うことは、名島寮の再開は多くの人の祈りや願いや努力によって実現したという事実です。その中に、九州大学 YMCA に所属していた中村哲さんの影響もあったと私は感じています。1990年代初め頃すでにペシャワールでお働きになっていた中村哲さんは、実際的に名島寮の再開に関わられた訳ではないのですが、その存在は、間接的にではありますが大きな役割を果たして下さいました。そのことを書かせていただきます。

名島寮は1957年に創設され1972年に閉寮。その後は某企業の寮として利用されてきました。私たち現役学生の活動の拠点として名島寮を再開したいとの機運が高まってきたのは1988年頃だったと思います。

中村哲さんは1984年ペシャワールに赴任、同年ペシャワール会が発足されましたので、その活動は当時の私たちの耳にするところとなりました。先輩のご活躍をもっと知りたくて1990年6月に中村哲さんをお招きして九州大学六本松キャンパスで講演会を開催しました。100人入る教室が学生でほぼ満席になったと記憶しています。また、同年8月の九州地区学生 YMCA/YWCA 夏期学校^(注)の講師としてもお招きしました。「危険な関係ー日本とアジアー」をテーマに YMCA 阿蘇キャンプ場に40名ほどの学生(九州大学、熊本大学、長崎大学、活水女子大学ほか)が集いました。参加した学生による記録には次のようにあります。「隣人とは誰か」という深い問いを得たという感想です。

…(それは)おそらく(中村哲さんがペシャワールで)自分の隣人を見つけることができたからでしょう。今のところ、私は自分の隣人が誰なのか全く分かりません。いえ、多分分かろうとしていないと言った方が正しいと思います。しかしやはり探して行きたいと思うのです。…

これらの講演会・夏期学校に中村哲さんを講師として招く際の仲介をして下さったのが、故・佐藤雄二さん(当時ペシャワール会事務局長、九州大学 YMCA 名島寮シニア)

でした。はじめはそのようなことだったのですが、寮の再開を目指しているのと同時期でしたので、このことでもいろいろと相談にのっていただき、九州大学YMCAの理事にもなっていただきました。ご自宅に招いて下さってお食事をいただきながらお話をさせてもらったのも1度や2度ではありません。再開までのプランや自らの名島寮体験に基づいた再開後の寮の構想についてアドバイスをして下さいました。名島寮再開に向けた若手OB・OG会（1990年8月5日、箱崎の「やかた寿司」にて）を開くことができたのも佐藤雄二さんが周りにずいぶん声をかけて下さったおかげでした。10人以上集まって下さったOB・OGは、中村哲さん、佐藤雄二さんと同世代の方々と、遠くは関東地方からも駆けつけて下さいました。会での話題は名島寮再開のことと並んで、中村哲さんやペシャワール会の活動のことでした。この会を機に名島寮再開への動きが一気に進んだと思います。



九大YMCA名島寮再開に向けた若手OB・OG会1990年8月5日

中列中央に佐藤雄二さん、後列右から3人目に山田信さん

佐藤雄二さんのガンが見つかったのは、そんな最中でした。1年くらい闘病なされ、結局、寮再開直後の1991年12月9日にお亡くなりになりました。11月の寮再開記念会には出席したいということをしていましたが叶いませんでした。私は再開した寮で生活しながら寮の理念を模索する中で、生前の佐藤雄二さんのお話しになっていたことを振り返ることが何度もありました。もし佐藤雄二さんがご存命だったなら再開後の名島寮の理念はきっと違ったものになっていたはずです。

全く同じことが山田信さんにも言えて、九州大学移転に伴う寮移転のことを一番望み

つつ心配しつつも、新しい寮（一麦寮）の完成（2017年4月）を目にすることなくやはりガンで2015年12月9日にお亡くなりになりました。山田信さんがご存命だったなら一麦寮の理念はきっと今とは違ったものになったはずです。

前述の1990年6月の六本松キャンパスでの講演会后、近くの「もつ鍋・三蔵」において参加者で中村哲さんを囲み懇親会を開きました。そこでは講演とは違い、参加者一人一人、中村哲さんとざっくばらんなお話をさせてもらいました。そこで中村哲さんから言われた忘れえない言葉があります。「落合くん。学生時代って大切だよ。学生時代やっていたこと考えていたことっていうのは、その後もそのままその方向で行くものです。多くの人見てると大体そう思います。」それはご自身のペシャワールでの活動の基礎が学生時代、すなわちこの学生YMCAでの活動にあった、だから君も今を大切にしてください、ということをおっしゃったのではないかと思います。

佐藤雄二さん、山田信さん、そして今回、中村哲さんを天に送りました。九州大学YMCA・名島寮・一麦寮がこのような優れた先輩たちの命のリレーによって存立していることを改めて心に刻むとともに、残された者はそのバトンを大切に受け継いでいかななくてはいけないと思わされる次第です。

(注) 1967年に阿蘇ルーテル山荘で開催された「九州学生YM・WCA連盟第16回夏期学校」には当時学生だった中村哲さんも参加されたことが、熊本大学YMCA花陵会所蔵の報告書に記載されている。テーマは「イエスと私」。講師は滝沢克己。